バラーズリー『貴人の系譜』の出版史

A Publication History of al-Balādhurī's *Ansāb al-Ashrāf*

高野　太輔（大東文化大学国際関係学部）
KONO Taisuke

はじめに

本稿では、西暦9世紀に活躍したバラーズリー Aḥmad b. Yaḥyā b. Jābir al-Balādhurī の著作である『貴人の系譜（*Ansāb al-Ashrāf*）』が刊本として出版されてきた歴史を詳述する。写本にして1,000頁～2,000頁前後にのぼる本書の校訂作業は、様々な理由から複雑な経過を辿ってきた。まず、これまでに出版された刊本の書誌情報と略号を以下に記しておく。

J1: S. D. Goitein（ed.）, *The Ansāb al-Ashrāf of al-Balādhurī*, Vol. V, Jerusalem: Hebrew University Press, 1936.

J2: Max Schloessinger（ed.）, *The Ansāb al-Ashrāf of al-Balādhurī*, Vol. IV B, Jerusalem: Hebrew University Press, 1938.

A1: Muḥammad Ḥamīdullāh（ed.）, *Ansāb al-Ashrāf*, Vol. I, Cairo: Dār al-Ma'ārif, 1959.

J3: Max Schloessinger & M. J. Kister（eds.）, *The Ansāb al-Ashrāf of al-Balādhurī*. Vol. IV A, Jerusalem: the Magnes Press, the Hebrew University, 1971.

A2: Muḥammad Bāqir al-Maḥmūdī（ed.）, *Ansāb al-Ashrāf*, vol. 2-3, Beirut, 1974-1977.

B1: 'Abdal'Azīz Ad-Dūrī（ed.）, *Ansāb al-Ašrāf*, vol. 3, Bibliotheca Islamica 28c, Beirut, 1978.

B2: Iḥsān 'Abbās（ed.）, *Ansāb al-Ašrāf*, vol. 4/1, Bibliotheca Islamica 28d, Beirut, 1979.

J4: Khalil 'Athamina（ed.）, *Ansāb al-Ashrāf*, Vol. VI B, The Max Schloessinger Memorial Series 7, Jerusalem: Hebrew University Press, 1993.

A3: Iḥsān Ṣidqī al-'Amd（ed.）, *Al-Shaykhān: Abū Bakr al-Ṣiddīq wa-'Umar b. al-Khaṭṭāb wa-walad-humā*, Kuwait, 1989.

B3: Iḥsān 'Abbās（ed.）, *Ansāb al-Ašrāf*, vol. 5, Bibliotheca Islamica 28g, Beirut, 1996.

A4: Suhayl Zakkār & Riyāḍ Ziriklī（eds.）, *Kitāb Jumal min Ansāb al-Ashrāf*, Beirut, 1996（13vols.）

B4: Ramzi Baalbaki（ed.）, *Ansāb al-Ašrāf*, vol. 7/1, Bibliotheca Islamica 28i, Beirut, 1997.

B5: 'Abdal'Azīz Ad-Dūrī & 'Iṣām 'Uqla（eds.）, *Ansāb al-Ašrāf*, vol. 4/2, Bibliotheca Islamica 28e, Beirut, 2001.

B6: Muḥammad Al-Ya'lāwī（ed.）, *Ansāb al-Ašrāf*, vol. 7/2, Bibliotheca Islamica 28j, Beirut, 2002.

B7: Wilferd Madelung（ed.）, *Ansāb al-Ašrāf*, vol. 2, Bibliotheca Islamica 28b, Beirut, 2003.

B8: Yūsuf al-Marʿashlī（ed.）, *Ansāb al-Ašrāf*, vol. 1/1, Bibliotheca Islamica 28a/1, Beirut, 2008.

B9: Yūsuf al-Marʿashlī（ed.）, *Ansāb al-Ašrāf*, vol. 1/2, Bibliotheca Islamica 28a/2, Beirut, 2008.

A5: Maḥmūd al-Firdaws al-ʻAẓm（ed.）, *Ansāb al-Ashrāf*, Damas: Dār al-Yaqaẓah al-ʻArabīyah, 1996-2010（26vols.）. ※ vol. 13以降の表題は *al-Mustadrak ʻalā al-Balādhurī, Ansāb al-Ashrāf*.

B10: Riḍwān as-Sayyid（ed.）, *Ansāb al-Ašrāf*, vol. 4/3, Bibliotheca Islamica 28f, Beirut, 2019.

写本

上記の刊本の底本となった主な写本は、以下の通りである。

1）**ベルリン写本**（Petermann II 633, Berlin）：W・アールヴァルトが1883年にバラーズリーの著作の一部ではないかと考えて公刊したもの。全188葉。イスタンブル写本 No.597の1110～1196頁と No.598の1～29頁に相当する[1)]。

2）**パリ写本**（Ms. Schefer, Bibliothèque nationale de France, Arabe.6068）：全812葉[2)]。『貴人の系譜』の最初の四分の一ほどにあたる。アッバース朝初代カリフ・サッファーフの記述の途中までが含まれており、ウマイヤ朝やアラブ諸族の話は脱落している。ムハンマド・ハミードッラーによると、東洋学者シェフェールの依頼によってイスタンブル写本の一部を引き写したものに過ぎないという[3)]。

3）**イスタンブル写本**（Aşir Efendi 597/598）：1227葉から成り[4)]、全文を網羅した完全な写本。No.597と No.598の二部に分かれている。1902年にハンブルクで開かれた第13回国際オリエンタリスト会議においてC・H・ベッカーが発見を報告し、その存在が知れ渡った。のちにラバトA写本が発見されるまでは、最も重要な写本であった。現在はスレイマニエ図書館の Reisülküttab Library として所蔵されている[5)]。

4）**ラバト写本**：ラバト写本については、その状態、由来、書誌データについて情報が

1） **A1**, p.5。

2） BNの *Catalogue de la collection de manuscrits orientaux arabes, persans et turcs*, Paris, 1900, p.57には810 feuillets とあるが、ド・フーイェは812葉としている（M.J. de Goeje, “Al-Belādhorī's Ansāb al-Aschrāf”, *Z.D.M.G.*, 38（1884）, p.384）。写本では、f.143の次がf.144/145、f.316/317の次がf.317/319とナンバリングされており、最終葉はf.810/812aである。

3） **A1**, p.5。

4） **J1**, p.11。**A1**, p.5はNo.597が1196頁、No.598が1268頁としていて、単純に計算すると1232葉になるが、**J1**とのズレの詳細については現物を確認する必要がある。

5） **A1**, p.5; **B7**, p.6。

錯綜しており、はっきりしない点が多い。まず、1960年にムハンマド・ハミードッラーが紹介して知られるようになったのが、Bibliothèque Générale（al-khizānah al-ʻāmmah）に所蔵されていたラバト A 写本である[6]。13世紀に作成され、イスタンブル写本の元になったと考えられているもので、全467葉934頁から成っている[7]。グラーウィー・パシャの蔵書のひとつであり、写本番号は Glāwī 7番[8]、**J1**～**J4**と**A1**では使われていないが、それ以外の刊本で利用されている。特に、**A5**はこちらを底本としている。

一方、**B1**,（*ʼalif*）にはイスタンブル写本の他に「二番目の写本が al-maktabah al-ʻāmmah bil-Ribāṭ で発見され、さらに三番目の写本と、四分の一が失われた四番目の写本とが、al-khizānah al-mulkīyah bil-Ribāṭ で見つかった」と記されている[9]。この Bibliothèque Royale（al-khizānah al-mulkīyah）に所蔵されているという二つの写本を仮にラバト M 写本(1)(2)と呼んでおく。**B2**, p.624；**B3**, p.306；**B4**, p.535；**B6**, p.374には al-khizānah al-mulkīyah の写本を利用したと書いてあるだけで、(1)なのか(2)なのかは明記していない[10]。また、**B1**～**B10**はラバト M 写本の整理番号についても全く記載していない。**A3**, p.6には Bibliothèque Royale の写本が2518番、Bibliothèque Générale の写本が6914番とあり、**J4**, p.16にも the general collection of the Royal Library in Ribāṭ の2518番の一部を見たと書かれているので、M 写本(1)(2)の一部もしくは全部が2518番なのであろう。また、**B8**, p.73によると、al-khizānah al-ʻāmmah には上記 Glāwī 7番の他に6914番という別の写本があることになっており、**A3**, p.6が指しているのはこれではないかと考えられるが、詳しいことは現物を確認してみなければ分からない[11]。

その他、カイロやサナアにも写本があると言われているものの、いずれも情報が少なく、**A3**を例外として上記の刊本には利用されていない。

ヘブライ大学による出版

『貴人の系譜』が公刊されるに至った経緯については、ゴイテインが簡潔に説明しているため、以下にそのまま記載することにしたい。

6） Muḥammad Ḥamīdullāh, “Makhṭūṭah jadīdah min Ansāb al-Ashrāf lil-Balādhurī”, *Majallat Maʻhad al-Makhṭūṭāt al-ʻArabīyah*, vol.6（1960）, pp.211-288。Bibliothèque Générale は2003年に La Bibliothèque nationale du royaume du Maroc（BNRM）/ al-maktabah al-waṭanīyah lil-mamlakah al-Maghribīyah に改称している。

7） **A4**, vol.1,（*ghayn*）、**B8**, p.73。

8） **B7**, p.6および**B8**, p.73はGlāwī 7としており、ムハンマド・ハミードッラー前掲論文の p.212にも番号は7番と記されている。スハイル・ザッカールは**A4**, vol.1,（*ghayn*）の序文中で79番と書いているが、同巻（*hāʼ*）-(*wāw*)の実物写真では 7 番と書かれているように見える。

9） **B5**, p.589にも同様の記述があり、(1)と(2)を区別している。

10） 可能性として、全く同じ写本が 2 セットあり、片方は一部が失われているのかもしれない。

11） **A4**,（*ghayn*）にはal-khizānah al-mulkīyah所蔵の写本No.6914の一部を見たと書かれており、情報の混乱が甚だしい。

1883年、W・アールヴァルトは、作者不明のベルリン写本に含まれていたアブド・アル＝マリクの治世に関する歴史的断片を公刊した。その校訂版の序文で、彼はこの断片が著名な歴史家バラーズリーの『貴人の系譜（*Ansāb al-Ashrāf*）』の一部であるという結論に至った。この見解は、ネルデケ（『ゲッティンゲン学術会報』1883年、1096-1109頁）およびトルベッケ（『東洋文献学通信』第１号、153-156頁）により、それぞれの書評で支持され、さらにパリ写本（『貴人の系譜』の約四分の一を含んでいる）を調査したド・フーイェ（『ドイツ東洋学会報』第38号、382-406頁）によって、疑いの余地なく確認された。ド・フーイェはその論文で、パリ写本が近いうちに出版されることを期待していると述べている。なぜなら、それが「ほぼすべての頁に重要な内容を含んでいる（fast Seite für Seite sehr belangreich）」からである。1902年、ハンブルクで開催された第13回国際オリエンタリスト会議において、C・H・ベッカーはイスタンブルで『貴人の系譜』の完全な写本を発見したことを報告し、その出版を提案した（第13回国際オリエンタリスト会議報告書、ライデン、1904年、305頁）。この提案はド・フーイェとゴルトツィーアー（『ドイツ東洋学会報』第56号、48頁）によって支持され、今は故人となったグレーフェ、J・ホロヴィッツ、ケルンに加え、M・グイーディおよびヴェンシンクといった著名な東洋学者たちが協力を申し出た。[12)]

アールヴァルトが出版したのは Ahlwardt, E., *Anonyme Arabische Chronik Band XI vermuthlich das Buch der Verwandtschaft und Geschichte der Adligen von Abulhasan ahmed ben jahjā ben gābir ben dāwūd elbelāḏorī elbagdādī*, Greifswald, 1883で、活字が入手できなかったのかアラビア語の本文と索引部分は手書きである。「第11巻」と名付けられているのは、写本の中に「第11巻の第２葉」「これにて第11巻は終わる」といった書き込みが散りばめられていたからに他ならない[13)]。

その後、1931～32年にS・D・ゴイテインとG・ヴァイルが協議して出版に関する細則を定めると同時に、「まず本書の中核を占めている（作品全体の三分の一を超えている）ウマイヤ朝史の部分を最初に出版することが望ましい」という基本方針が確認された。最初にゴイテインを校訂者とする第Ⅴ巻がイェルサレムのヘブライ大学出版局から公刊されたのは、そのためである。1936年に出版された第Ⅴ巻（**J1**）は、イスタンブル写本 No.597 の f.459b-569b[14)] にあたり、ウスマーン、マルワーン、イブン・アッ＝ズバイルの反乱、ムフタールの乱などの話題を扱っている。

12）**J1**, p.7。

13）Ahlwardt, *op.cit*, p.5。

14）ヘブライ大学のシリーズは写本を葉番号で記しているが、大半の刊本は頁番号で記している。Muhammad Hamidullah, “Le «Livre des généalogies» d’al-Balāḏurīy”, *Bulletin d’études orientales*, t.14（1952-1954）, p.197によると、写本自体は頁番号でナンバリングされているにも関わらず、ヘブライ大学のシリーズは「勝手に（arbitrairement）」葉番号を振った、としている。

次いで、マックス・シュレスィンガーを校訂者とする第Ⅳ巻が公刊される予定であったが、後半部分の第Ⅳ/B 巻(**J2**)は1938年に出版されたものの、第Ⅳ/A 巻(**J3**)については1944年 6 月にシュレスィンガーが世を去ったため、印刷直前まで行っていた原稿が第二次世界大戦後の混乱などで宙に浮いてしまい、ようやく1971年になってからM・J・キスターの改訂を受けて公刊された。第Ⅳ/A 巻はイスタンブル写本の f.345a-409b にあたり、アブド・シャムス家の系譜、ムアーウィヤ、ハワーリジュ派、ズィヤード・イブン・アビーヒなどを扱う。第Ⅳ/B 巻は f.409b-459b にあたり、ヤズィード1世、ズィヤードの一族、その他のウマイヤ家について記述がある。

さらに年月が経って、1993年にハリール・アサーミナの校訂で公刊されたのが、第Ⅵ/B 巻(**J4**)である。イスタンブル写本の f.716a-753a にあたり、内容はヒシャームとその時代を扱っている。この **J4**では、イスタンブル写本を底本としながら、ラバトM写本を部分的に利用している。

ヘブライ大学から出版された刊本の最大の特徴は、文献学的な網羅性を重視し、詳細な索引や註を付けるだけでは飽き足らず、膨大な量の並行記事のデータを他の文献史料から見つけ出して来ていることである。逆に言うと、この水準を要求されたことが未完のシリーズに終わった一因かもしれず、最後の **J4**ではもはやそうしたデータは提示されていない。

ドイツ東洋学会による出版

上記の **J3**が出た後、ドイツ東洋学会（Die Deutsche Morgenländische Gesellschaft）が中心となって出版しているイスラム叢書（Bibliotheca Islamica）シリーズの一部として、『貴人の系譜』を公刊しようとする動きが別個に始まった。巻によって販売元が次々と変更されているが、出版地は一貫してベイルートである[15)]。

最初に公刊されたのは1978年の第 3 巻(**B1**)で、イスタンブル写本 No.597の526-689頁にあたり、アッバース家、サッファーフ、マンスール、預言者の叔父と叔母たちについて扱っている。校訂者のA・A・ドゥーリーは、イスタンブル写本だけではなくラバトA写本、ラバトM写本を全て参照し、写本間の異同を脚註に示している点が、ヘブライ大学のシリーズとの大きな違いである。

次に公刊されたのは1979年の第4/1巻(**B2**)で、イスタンブル写本 No.597の689-989頁にあたり、ウマイヤ家の歴史について扱っている。この巻はヘブライ大学の第Ⅳ/A 巻、第Ⅳ/B 巻、そして第Ⅴ巻の最初の一部と完全に重なっているが、イスタンブル写本だけで

15) 1978年のTeil 3と1979年のTeil 4/1は欧文中表紙にWiesbadenと書かれているが、これは販売元のFranz Steiner Verlag GMBHの所在地であり、印刷・出版はベイルートで行われている。1996年に出たTeil 5の中表紙にはIN KOMMISSION BEI FRANZ STEINER VERLAG STUTTGART（1984年に移転）の上にBEIRUT 1996と明記されているため、出版地は一貫してベイルートと見なした方がよい。

はなくラバト写本を用いることによって「可能な限りそれを超えるよう努めた[16]」としている。

その後、17年ほど経ってから1996年に出たのが第５巻（**B3**）で、「その他のクライシュ族」が扱われている。アブー・バクルやウマルの伝記が入っているのは、この巻である。校訂者のイフサーン・アッバースはイスタンブル版の頁番号を示さず、刊本の１～343頁にはラバトＡ写本の番号（374-521）を、345～601頁にはラバトM写本の番号（1-91）を表示している[17]。イスタンブル写本では、No.598の415-697頁に該当する。

翌1997年に出た第7/1巻（**B4**）は、イスタンブル写本 No.598の963-1118頁にあたり、タミーム族の系譜の途中から始まって、カイス・アイラーン族の中のガタファーン族の系譜の途中で終わる。2001年には、少し遡って第4/2巻（**B5**）が出版されており、イスタンブル写本 No.597の989-1196頁、すなわちヘブライ大学版第Ｖ巻の大半と、その続きが少し含まれている。

2002年に出た第7/2巻（**B6**）は上記ガタファーン族の系譜の途中から始まり、スライム族とサキーフ族について述べたところで終わっている[18]。本来であれば、カイス・アイラーン族の主要系統のひとつであるアーミル・ブン・サアサア族などの系譜が後に続き、次いでラビーア族、そしてカフターン系の諸集団と続いていくはずであったのだろうが、『貴人の系譜』はここで未完に終わっている。なお、本文の後の374-5頁にはゴイテインが **J1** で紹介している[19]イスタンブル写本の奥書が記載されている。次いで、2003年に出た第２巻（**B7**）はイスタンブル写本 No.597の278-526頁にあたり、もっぱらアリーの伝記を取り扱っている。

2008年には、第1/1巻（**B8**）と第1/2巻（**B9**）が同時に刊行された。**B8**の冒頭には142頁におよぶアラビア語の詳しい解題が付けられている。ラバト写本を底本にしたとのことだが、Glāwī 7と No.6914のどちらなのかは書かれていない。**B8**の欄外には何の説明もなく2-57頁、**B9**には57-114頁と表示されており、イスタンブル写本の頁数とは食い違っていることから、ラバト写本の頁数だと思われる。

2019年には、第4/3巻（**B10**）が出版された。この巻では、アブド・アル＝マリク治世の途中からウマイヤ朝滅亡までを扱っている。なぜ中途半端な箇所から始まっているかと

16）　**B2**, p.625。

17）　**B3**, p.603には「1～321頁にはラバトＡ写本の番号を、321～509頁にはラバトM写本の番号を表示した」とあるが、実際には頁数が大幅にズレて上記のようになっている。なお、**B1**, (*'alif*) によるとラバトM写本(1)(2)は四分冊に分かれているとのことなので、頁番号が新たに1頁目から始まっていると推測される。

18）　この巻は詳しく写本の頁数が書き込まれており、イスタンブル写本で第554b～629b葉、al-khizānah al-'āmmah写本で889～934頁、al-maktabah al-mulkīyah al-Ḥasanīyah写本で450～558頁となっている。また、イスタンブル写本の頁番号も1118～1267頁として欄外に振られているが、なぜ葉番号と頁番号で切れ目の位置が違うのかについての説明は見当たらない。

19）　**J1**, p.26。

いうと、イスタンブル写本 No.597と No.598の切れ目がここにあり、この **B10**が No.598冒頭から始まるように区切られているからである（番号で言うと1-415頁にあたる）。ただし、この巻はラバト写本の番号のみの表示となっており、al-khizānah al-ʻāmmah の1-309頁、al-khizānah al-mulkīyah の466-625頁という数字が両方とも記載されている[20]。

未公刊の第 6 巻については準備中とのことだが、Bibliotheca Islamica シリーズの出版物一覧に出ている校訂予定者の名前が途中で変更されているため、何らかの事情で遅れているものと思われる。

その他の出版事業

こうした二つの潮流とは独立して出版された刊本も何種類か存在する。その嚆矢は、当時フランス国立科学研究センターの研究員を務めていたムハンマド・ハミードッラーが、アラブ連盟写本研究所の協力を得て1959年に出版した **A1**である。この刊本は「第 1 巻（al-juz’ al-awwal）」と銘打たれている通り、『貴人の系譜』の冒頭部分にあたる預言者ムハンマドの伝記を扱っており、イスタンブル写本 No.597の2-286頁にあたっている（ただし刊本では番号が表示されていない）。ラバト写本は発見前であったため利用されていないが、この刊本にはイスタンブル写本の全目次が記されており[21]、非常に便利である。他史料の並行記事やコーランの出典なども脚註に記載されており、校訂本としての水準は低くない。

続いて出版されたのが、ムハンマド・バーキル・アル＝マフムーディーによる1974〜77年の **A2**である。この刊本は中表紙に巻番号が見当たらず、本文中の柱に1974年版は第 2 巻、1977年版は第 3 巻と書かれている。前者はイスタンブル写本 No.597の286-437頁、後者は437-525頁にあたる。校訂者はシーラーズ生まれのシーア派であるためか、アリーとその一族に関する部分だけを特に採り上げて校訂したと推測される。ただし、その内容は「校訂者が勝手に本文を改竄し、本文中に登場する人物に神の恩寵や呪詛を散りばめたため、意図的に歪められている」とスハイル・ザッカールによって批判されており[22]、利用には注意が必要である。

1989年に出版された **A3**は変則的な内容で、『貴人の系譜』からアブー・バクルとウマルの伝記部分のみを抜粋した刊本である。エジプト国立図書館所蔵の写本 No.1103とラバトM写本、ラバトA写本の三つを底本にしたということだが、どういうわけか本文中に附

20） イスタンブル写本No.598の1頁目から始まるこの巻において、なぜラバトA写本の頁番号が1頁から始まるのか不明。**B1**, (*’alif*)によると四分冊になっているのはラバトM写本であって、ラバトA写本は一続きとされている。また、この巻はラバトA写本309頁という数字で終わっているが、直後から始まっているはずの第 5 巻(**B3**)はラバトA写本374頁からになっており、数字が合っていない。

21） **A1**, pp.34-53。 数字は葉番号ではなく頁番号であることに注意。 同じ目次はMuhammad Hamidullah, “Le «Livre des généalogies» d’al-Balāḏurīy”, pp.197-211にも掲載されている。

22） **A4**, vol.1, (*‘ayn*).

されている写本の頁番号は470-498および576-657となっており、これはイスタンブル写本No.598の頁番号である[23]。

そして、1996年に待望の全巻セットである**A4**が出版された。校訂者はスハイル・ザッカールと教え子のリヤード・ズィリクリーで、イスタンブル写本、ラバトA写本の両者を底本に、ラバトM写本を部分的に参照して編纂された。ただし、写本の頁番号は一切表記されておらず、写本間の異同にも無頓着のようである。**B8**の校訂者であるユースフ・アル＝マルアシュリーは、この**A4**を「誤植、歪曲、省略に満ちた完全版である」と評している[24]。各巻が取り扱っている部分については、末尾の対照表を参照されたい。

ダマスクス版の『貴人の系譜』

1996年から2010年にかけて、マフムード・フィルダウス・アル＝アズムによってダマスクスのDār al-Yaqaẓah al-ʻArabīyah から全26巻におよぶ『貴人の系譜』が出版された（**A5**、26巻目は総索引）。イスタンブル写本ではなくラバトA写本を底本としているが、どちらの写本にも含まれていないラビーア族や南アラブ系諸族の記述を含んでいることが最大の特徴である。この刊本が出た当初は、何か新しい写本が発見されたのかと学界に衝撃が走ったが、蓋を開けてみると、予想外の内容に再び驚きが広がることになった。以下に、各巻から抜粋した校訂者による序文の内容を挙げておく。

> 至高なる神のご加護により、バラーズリー（神の慈悲あれ）の『貴人の系譜』は完結した･･･。自らは研究もせず、研究をしている人間に憤慨しているだけの者どもに一言申し上げる。彼らはヘブライ大学が全文を出版したなどと言いふらしているが、これは嘘であり、誤りである。系譜書の校訂をするのに最も相応しい人間は私である。なぜなら、私はイブン・アル＝カルビーの系譜に関する二著、『大全（*al-Jamharah*）』と『大系譜書（*al-Nasab al-Kabīr*）』を校訂済みだからである…。バラーズリーの典拠は、イブン・アル＝カルビーの『大全』であった。彼はイブン・アル＝カルビーが『大全』で言及していないことを追加したため、本書は『大全』よりも包括的なものとなった。もし、至高なる神が彼の寿命をのばしていたならば、「すべてのアラブ諸部族について本書を書く」と本人が述べている通り、これを完成させていたであろう。（**A5**, vol.12, p.3）

> 私はイブン・アル＝カルビー『系譜大全』の校訂者であるから、バラーズリー『貴

23）**A3**, p.6によると、 エジプト国立図書館所蔵の写本No.1103はイスタンブル写本の“al-muṣawwarah”ということなので、もしかしたら頁番号も含めて全く同じものなのかもしれない。Muhammad Hamidullah, “Le «Livre des généalogies» d’al-Balāḏurīy”, p.198にも、カイロ国立図書館にあるのはイスタンブル写本の“les photos”およびその“la copie”であると書かれている。

24）**B8**, p.76。

人の系譜』の典拠がイブン・アル＝カルビーの著作であったことに鑑みて、ムダル族の系譜を完成させることが自分の責務だと考え、同部分を執筆し、これを『バラーズリー「貴人の系譜」の補遺（*al-Mustadrak ʻalā Ansāb al-Ashrāf*）』と名付けた…。（**A5**, vol.13, p.3）

本巻とそれに続く系譜群の中で述べられているすべてのことは、私が校訂したイブン・アル＝カルビー『マアッドとヤマンの大系譜書』から引用したもので、さらに『イブン・アル＝カルビーによる系譜大全の概略』の写本を参照した…。（**A5**, vol.16, p.3）

つまり、未完に終わったと考えられていた『貴人の系譜』の続きの写本が発見されたわけではなく、イブン・アル＝カルビーの系譜学書から校訂者が勝手に情報を付け足したのが、この刊本ということになる。実際、よく見ると第13巻以降は表紙のタイトルも『バラーズリー「貴人の系譜」の補遺』に置き換わっている。

しかし、イブン・アル＝カルビーの著作である『系譜大全』と『マアッドとヤマンの大系譜書』は、二つを合わせても刊本で千数百頁の分量しかない[25]。それならば、**A5**の第13巻～第25巻に含まれている膨大な量の本文は、どこから来ているのであろうか。

実を言うと、マフムード・フィルダウス・アル＝アズムはイブン・アル＝カルビーの原文を（自由に改変しながら）引き写しただけでなく、随所に他の史料から引用した補足情報を盛り込んでおり、分量としてはむしろ後者の方が多くなっている。要するに、第13巻以降は各種史料に依拠しつつも、全体としては彼自身が書き下ろしたオリジナルな史料なのである。「系譜学的な情報」と「有名人物の列伝」を融合させるというバラーズリーの執筆方針を忠実に継承している点は評価できるが、その盛り込んだ情報の出典を全く書いていない箇所が多いため、文献学的には使用に耐えない出来上がりになったと言ってよい。前述のユースフ・アル＝マルアシュリーは、この版についても「誤植、歪曲、甚だしい省略に満ちており」「イスラムの遺産たる書物を学術的に校訂するための基礎が欠けている」と痛烈に批判している[26]。いずれにせよ、一千年以上も前に書かれた作品の続きを書くという行為に何の疑問も抱いていないように見受けられるのは、連綿と続くアダブの伝統に今もなお身を置いているからであろうか。

このほか、Muḥammad Muḥammad Tāmir（ed.）, *Ansāb al-Ashrāf*, Beirut: Dār al-Kutub al-ʻIlmīyah, 2011（8vols.）; Muḥammad b. ʻAbd al-Hādī b. Razān al-Shaybānī（ed.）, *Ansāb al-Ashrāf lil-Balādhurī ʻAbd al-Malik b. Marwān*, Medina: Markaz Buḥūth wa-Dirāsāt al-Madīnah al-Munawwarah, 2019（2vols.）なども出版されているようだが、入手困難のため筆者未見である。

25） 両史料については、拙著『アラブ系譜体系の誕生と発展』山川出版社、2008年、79-88頁に詳しく解説しているので参照されたい。

26） **B8**, pp.76-77。

各刊本の対照表

最後に、各刊本が収録している箇所を示した対照表を作成したので、挙げておく。便宜的に、イスタンブル写本の頁番号を基準として整理してある。

バラーズリー『貴人の系譜』対照表（各刊本の内容に対応するイスタンブル写本の頁番号を表示）

イスタンブル写本		J1～ J4	B1～ B10	A1～ A2
No.597	2-135		vol.1/1（**B8**）	vol.1（**A1**）
	135-278		vol.1/2（**B9**）	
	278-286		vol.2（**B7**）	
	286-526			vol.2-3（**A2**）
	526-689		vol.3（**B1**）	
	689-818	vol.IV/A（**J3**）	vol.4/1（**B2**）	
	818-918	vol.IV/B（**J2**）		
	918-989	vol.V（**J1**）		
	989-1138		vol.4/2（**B5**）	
	1138-1196			
No.598	1-235		vol.4/3（**B10**）	
	235-309	vol.VI/B（**J4**）		
	309-415			
	415-697		vol.5（**B3**）	
	697-963			
	963-1118		vol.7/1（**B4**）	
	1118-1268		vol.7/2（**B6**）	

A4	A5
Vol.1: 2-187	vol.1: 2-278
Vol.2: 187-330?	vol.2: 278-526
Vol.3: 330?-526	vol.3: 526-689
Vol.4: 526-689	vol.4: 689-890
Vol.5: 689-874	vol.5: 890-1023
Vol.6: 874-1075	vol.6: 1023-1196,1-105
Vol.7: 1075-1196,1-85	vol.7: 105-415
Vol.8: 85-261	vol.8: 415-558
Vol.9: 261-450	vol.9: 558-697
Vol.10: 450-666	vol.10: 697-846
Vol.11: 666-846	vol.11: 846-1088
Vol.12: 846-1041	vol.12: 1088-1268
Vol.13: 1041-1268	